

パウロの祈り その三 力を祈り求める

エペソ 3:14-21

3:14 こういうわけで、私はひざをかがめて、 3:15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。 3:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。 3:17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、 3:18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、 3:19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。 3:20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、 3:21 教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

導入

今朝は、新約聖書のパウロの祈りの学び第三回目となります。これまでで、パウロの祈りから多くのことを学びました。パウロは、氣にかけている教会のために具体的に祈りました。

コロサイの信徒たちの祈りから、私たちの生き方が主イエス・キリストを喜ばせるものとなるように祈るのが望ましいことを学びました。パウロは、主イエスに喜んでいただける生き方の特徴を4つ挙げます。

1. イエスに喜ばれる生き方とは、イエスに仕えて実を結ぶ生き方です。パウロは、クリスチャンがイエスに仕えて良い働きをすることなくイエスを喜ばせることはできないと考えました。
2. パウロは、クリスチャンが信仰生活において停滞したままでよいとは思いませんでした。信徒は常に神の知識において成長することを望むべきです。成長するには、神のみことばに従う必要があります。信仰が成長しているクリスチャンは、神に従うクリスチャンです。
3. イエスに喜ばれる生き方とは、苦しみを通っても耐え忍ぶ生き方です。苦しみを望む人はいませんが、苦難の中でイエスから離れずむしろイエスに助けを求めるなら、主は喜んでくださいます。
4. クリスチャンが喜んで御父に感謝をささげるなら、イエスに喜んでいただける生き方をしているとと言えます。

パウロは、ピリピの信徒たちのためにも祈りました。彼は、クリスチャンの愛が知識と識別力にあってまず成長するようにと祈りました。

パウロは、信徒たちの愛が聖書の教えに沿ったものであることを願っていました。罪を見逃す愛ではありません。

パウロは、「義の実」が私たちの生き方にあらわされるようにと祈りました。

神の実が私たちをとおして満ち溢れ、神がたたえられるように、ということです。

今朝は、パウロの祈りの学び第三回です。その祈りは、エペソ 3:14-21 に登場します。

これはパウロの祈りの中でも一番なじみのあるものでしょう。

この祈りには、おもにふたつの願いが込められています。

1. 神が聖霊によって私たちの内なる人を強めてくださるように。
2. 主イエス・キリストの無限の愛を理解する力が私たちに与えられるように。

まず私たちは 14 節を理解する必要があります。そうすれば、パウロの祈りの内容やそう祈った理由がわかります。

14 節で、パウロは、「こういうわけで、私はひざをかがめて、 」と言いました。つまり、祈るということです。ここで、こういうわけとはどういうわけか考えましょう。

パウロが祈った理由は、3 章の前半に関係があります。

3 章 1 節でも彼は「こういうわけで」と言いました。

パウロはおそらく、ここで祈り始めようとしたところで思いなおし、使徒の働きや教会との関係性をまず明確にすることにしたのでしょう。

ですから、この祈りに至った理由を知るには、3 章よりも前の 1-2 章に戻らなければなりません。

1-2 章でパウロは、失われていたユダヤ人と異邦人とを神が新しいひとつのコミュニティとしてくださったと言って神をたたえます。これは、イエスが十字架上で成してくださった御業によって成し遂げられました。

イエスが十字架上で死なれたのは、罪深い人間を神との正しい関係に立ち返らせるためです。

パウロは 2:19-22 で自身のことばをこう締めくくります。

2:19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。 2:20 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。 2:21 この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、 2:22 このキリストにあつて、あなたがたとともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

ですから、パウロがこのように祈ったのは、それがパウロの知る限り、信徒たちに対する神のみこころに沿った内容だからです。

自分のために祈るにせよ、他の人のために祈るにせよ、その内容が神のみこころにかなったものだという確信をもって祈れるのはすばらしいものです。

そうすると、少なくとも 3 つのことがわかってきます。

1. 神の目には、私たちが快適でいることよりも私たちがきよくなることのほうが大切です。
2. 神は、信徒たちが幸せであること以上に、神の教会が清く誠実であることを喜ばれます。
3. 神に従う人、祈りの中で神と時間を過ごすのを喜びとする人たちに神はご自身を示されます。これと対照的なのは、仕事や家庭、人間関係に必要以上に時間を費やし、神と過ごす時間を取らない人です。

パウロはまず、福音の基本的価値観が私たちの祈りを形作るべきだと言います。

つまり、「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(マタイ 6:33)ということです。

神を第一とするなら、あらゆるニーズについて心配する必要はありません。

神がすべて備えてくださるからです。

パウロの祈りについてまず学ぶことは、その内容が神の目的に沿っていることです。

次に、このパウロの祈りについて学ぶことは、天の御父に向けられた祈りであることです。(14 節)

以前学んだとおり、イエスは弟子たちに「天にいます私たちの父よ」と祈るように教えられました。

パウロの生きた時代、父親は家族の面倒をみるだけの存在ではありませんでした。父親は祝福を与える役目があり、家族や一族の長でした。

パウロが御前に出て祈った神は、全能の力ある神というだけではありません。イエスの尊い血潮によって、神はパウロの家族なのです。

主イエスを自らの救い主と信じて愛するなら、私たちも同じことが言えます。

マタイ 7:7-11

7:7 求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。 7:8 だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。 7:9 あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。 7:10 また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。 7:11 してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さないことがありますでしょう。

パウロは大胆に天の父に近づきます。それは、御父が良い物をくださると知っているからです。

パウロの祈りは 16 節からが本番です。

神が聖霊によって私たちの内なる人を強めてくださるように。

パウロが最初に願ったことは力です。他の書簡からもわかるように、パウロはつねに力を祈り求めました。パウロは 1 章 1 節で、神の全能の力が私たちのうちに働くようにと祈ります。

ここで注目すべき重要ポイントは、パウロが祈り求める力は、聖霊によって与えられるということです。リビングバイブルには、「どうか、父なる神が、その栄光に満ちた無限の富の中から、聖霊様を通して人を内面から強くする力をあなたがたに与えてくださいますように。」とあります。

パウロは、この力が内なる人を強めてくれるようにと祈りました。いったいどういう意味でしょう。

コリント第二 4:14-18 に、パウロの言いたいことがわかりやすく説明されています。

4:14 それは、主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたといっしょに御前に立たせてくださることを知っているからです。 4:15 すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現れるようになるためです。 4:16 ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。 4:17 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。 4:18 私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

パウロの肉体が彼の外なる人です。こちらは日々、衰えていきます。外なる人が衰えた後に残るのは、内なる人です。

パウロは、神の全能の力が私たちの内面を強めてくださるようにと祈っているわけです。

内面は、私たちの人格を形作る部分であり、私たちが天国に入れるよう備えてくれる部分でもあります。

人が死んだ後、復活のからだをいただく前に残されているのは、この内面です。

「この祈りの目的は何だろう」と思うでしょうか。

パウロは 17 節で、「キリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。」と語ります。

イエスが私を罪から救ってくださったと信じたときから、イエスは私の心に住まわれたのではなかったでしょうか。そのとおりです。しかし、パウロがここで使っている「住んでいてくださる」と訳された単語は、ギリシャ語では非常に強い意味合いを持ちます。

パウロは、イエス・キリストが私たちの心に住んで、そこをイエスの我が家としてくださるようにと祈っています。

パウロがこの単語でどういうことを伝えようとしたか、たとえを挙げてみましょう。

想像してみてください。あなたは田舎町で古民家を買いました。屋根は雨漏りがし、台所も古くて使いものになりません。部屋の壁は真っ黒で、障子は汚れや染みだらけです。和室の畳には雑草が生い茂っていました。

あなたは新婚の妻とこの家に越してきます。ふたりの蓄えで買えるのは、この家だけでした。ふたりはすぐさま家を掃除しはじめ、屋根も修繕しました。徐々に修理やリフォームが進み、台所もシステムキッチンにして、新しい家電を入れました。

障子には、素敵な鳥の模様が施された障子紙を貼り、畳も新調します。部屋の壁紙を張り替え、きれいにペンキを塗って、家は大変身しました。

数年経って、リフォームや修理を全部終えたある日、家に帰って来てあなたは思います。「我が家は素敵だな。本当にこの家が気に入っている」と。

最初に越して来た時は、素敵な我が家と呼べるものではありませんでしたが、今では家が心地よい場所となりました。

イエスが聖霊によって私たちの心に住まれるのもこれに少し似ています。

イエスは私たちの心に入って来られ、私たちの人生を片付け始められます。「この家が気に入った」と言える姿にするためです。

パウロは、イエスがエペソの信徒たちの心に住むのが気に入ったと言ってくくださるようにと、と彼らのために祈りました。

つまり、聖霊が信徒たちの人生を掃除してくださり、彼らの心が聖霊にとって心地よい場所となるようにと祈ったわけです。

人生を変えるには多大なエネルギーが必要です。イエスが私たちのうちに心地よく住まれるように私たちの人生を片付けるには、全能の神の力が必要です。

17 節はリビングバイブルでは次のように記されています。「キリスト様が、信じるあなたがたの心に住み、喜んでそこに住み続けてくださいますように。」

ですから、パウロが祈っているのはこういうことです。神の力が私たちの人生に働き、私たちの心がイエスに住んでいただくにふさわしい場所となるように。これは私たちにとっても、ぴったりの祈りです。

この祈りには犠牲が伴います。聖霊が私たちの生き方を変えようとなさるのに協力しなければならないからです。

聖霊に協力するとは、「もうこんなことはしたくありません。どうかやめられるように助けてください」と祈るだけでよいときもあります。

ある主婦は、医療関係の雑誌を読んで、コーラなどの炭酸飲料が子どもたちの健康に害を及ぼすことを知りました。彼女は夫と相談し、ふたりとも炭酸飲料を飲むのをやめることにしました。けれども、コーラが大好きな5歳の娘にどう説明してよいかわかりません。けれども、ふたりの知らない間に娘はこの話をカーテンの向こうで聞いていました。娘は部屋に入ってきて言いました。「ママ、わたしね、もうコーラはきらいになったの。」こうして一件落着きました。

私たちの人生を掃除するために何をしなければならないでしょう。ただ神のみことばに賛成し、それに従えるよう助けてくださいと聖霊に願うだけでよい場合もあります。

パウロのふたつめの願いは、主イエス・キリストの無限の愛を理解する力が私たちに与えられることでした。(18-19 節)

パウロはここでも力を祈り求めています。しかし、その目的は少し違います。イエス・キリストの計り知れない合いをしっかりと理解する力です。イエスの愛の広さ、長さ、深さ、高さを理解する力です。

パウロは、クリスチャンがイエスの愛について知らないと思っているわけではありません。パウロは、エペソの信徒たちにイエスの愛をさらに深く理解してほしいと願ったのです。

それは単なる頭の理解ではありません。もちろんそれも大切ですが、パウロの言っているのは、神の愛を心でしっかりと捉えることです。

詩篇 73:25-26 でアサフは、「73:25 天では、あなたのほかに、だれを持つことができます。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。73:26 この身とこの心とは尽き果てましよう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。」と語ります。

詩篇の著者は、大切なことをふたつ確信していました。

1. 彼は、イエスの愛の奥底にあるものを理解していました。人生は旅路であり、イエスを信じて愛していれば、その旅の終着地が天国であることを理解していました。私たちはこの地上の民ではありません。どこの国のパスポートを持っていようと、私たちの国籍は天にあります。私たちが天国に入れる資格は、イエスの尊い血潮によって得られました。
2. 詩篇の著者は、ただ頭で神を理解しているのではないと教えてくれます。彼の心は神の愛であふれていました。

パウロは、神の愛をしっかりと理解するには、神の御力が必要だと語ります。だからパウロは力を祈り求めたのです。

古い賛美歌に神の愛をとらえようとした内容のものが 있습니다。ジョージ・ウェイド・ロビンソン(1838-1887) 作詞の賛美歌で、一番の歌詞はこのような歌詞です。

永久の愛もて恵み導き

あまつみ霊の教えたまいし

またき安けさ尊きみわざ

尽きせぬ愛よわれは主のもの

尽きせぬ愛よ主はわがもの

クリスチャンが書いた人生の証を読むと、イエスの愛をさらに知りたいと願った多くの人は、その圧倒的な愛を体験していることがわかります。

クリスチャン作家の R・A・トーレイは、神の御顔を熱心に求めました。ある日、みことばを読んで祈っていると、神に愛されていることを悟り、その愛の深さに圧倒されて涙が止まらなくなったと言います。彼は耐えきれずに、神に、「愛を見せてくださるのはもう十分です」と言ったそうです。

私は、15 歳でクリスチャンになりました。その体験は本物でしたし、私は福音を信じました。けれども、徐々に教会に行ったり、クリスチャンと交わったりすることから離れていきました。10 年ほどして、私は人生に不満だらけの状態で、クリスチャンのカウンセリングサービスに電話するようになりました。これがきっかけでまた教会に行くようになりました。教会に行った最初の日曜日、牧師はルカ 15 章からメッセージを語りました。それは、放蕩息子のお話です。

その朝、私は神が心に語りかけてくださるのを感じ、罪を悔い改めて、神に赦しを請いました。そのとき、神が私を愛して赦してくださったことを深く感じました。私は長い間泣いていました。一時間ほどだったかもしれませんが。その朝、私は神の愛の深さを本当に知ったと言えます。

あなた自身に向けられた深い神の愛を、あなたも知ることができます。

あなたにとって初めての経験となるでしょうか。私のように、神から一度離れてしまっていたでしょうか。今、悩みを抱えていて、あなたの置かれている状況を神が心にかけていてくださることを知りたいと思っているでしょうか。

どんな状況であれ、私たちは今すぐイエスのもとに行くことができます。そして、どんなニーズでも持っていて、助けてくださいとイエスに願うことができます。